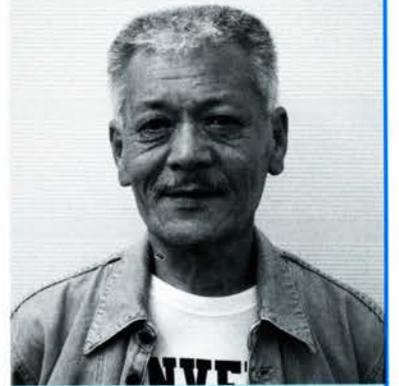




てくてく レポート

⑭

～リポーターが
お伺いします～



リポーター

みやはら けんたろう
宮原 健太郎さん
(65歳 下裾)

三宅氏との出会いは、平成9年の春、平成大野屋の2階で切り絵の指導をされておられた時のこと。郷土をこよなく愛されるそのやさしい心情が作風にあふれ、作品を通じての大野での活動を、また、人となりを知ってもらいたいです。

大野屋の切り絵を託す

郷土愛―せわしない現代生活にあって、この言葉は死語とまでいかずとも、どう心にとどめ表現するののか。

大正十四年生まれの八十二歳、**剪画**(切り絵)作家の三宅嵩たかし氏は、そのすべてを切り絵に託し発信しておられます。高い評価を受けても少しも飾らない気さくな同氏。制作した作品を通じて、そのあふれる心情をレポートしました。

土井利忠公の偉業知って

学びの里「めいりん」のロビーに「幕末大野藩の改革」と題して切り絵が掲げられているのをご存じですか。

これは、市内在住の切り絵作家の三宅嵩氏の作品です。幕末の名君といわれた七代目大野藩主の土井利忠公の偉業を紹介したものです。昨年の大雪で土井利忠公を祀った柳酒社が大きく損傷したことに心を痛め、もったこの名君のことを知ってほしいと思い制作されたそうです。

作品は、利忠公がまず人づ

くりが大事と開設した「明倫館」や、藩財政建て直しのため登用された内山長休、全国に展開された大野屋、山奥の小藩にあつて蝦夷地の開拓などに活躍した帆船大野丸の建造など、十一枚におよぶ図柄で構成されており、土井氏の先進的な功績が特徴的にとらえわかりやすく描かれています。

三宅氏は、どの作品を作る時もそうですが、この作品を作る時もその奥にある意味を納得いくまで調査・研究して構想を練ったそうです。その構想を元に独自の感性で芸術



学びの里「めいりん」に掲示してある作品

作品として仕上げました。

「この作品を見ることで、困窮を極めた大野藩の建て直しに心血を注いだ名君がここ大野に存在したことを知り、市民として誇りをもってほしい」と語っておられました。皆さんも一度学びの里「めいりん」でご覧になることをお勧めします。

市内各地で散見できます

三宅氏の作品は大野市の市中で散見することができま



三宅嵩氏プロフィール
昭和60年、教員定年退職を機に切り絵を始める。行政相談委員をされる傍ら、日本最大のアマチュア画家公募展「サロン・デ・ボザール展」で知事賞2回受賞など、多数の受賞歴を持つ。

アルされた五番商店街の街路灯には、大野城をはじめ、多くの作品が銘板のデザインに使われています。また、同じく五番通りの名水庵の玄関タペストリーにも大野城の作品が描かれています。

こんな作品も

そのほか、大野をこよなく愛される氏の作品は、大野の風物、歴史、文化といった広範なジャンルを、繊細にしてそれでいて大胆な構図で表現されています。



ふるさとカレンダー

平成元年から十五年間続けられたふるさとカレンダーやおおの踊りのうちわのデザインなどおなじみのものや、大野の方言番付といった変わったものもあります。作品の多くが懐かしい大野の風景であったり、今は見れなくなつた子どもの手遊び・方言であったりと、どこまでもふるさと大野にこだわり、広く知らせたい、残したいという思いが感じられました。その根底には大野を愛する心が強く伝わってきました。

切り絵との出会い・魅力

三宅氏は元々芸術に関心があり、シルクスクリーンや

ペン画などでもしてみましたが、油絵や水彩画など一般的でないものをもと思い、切り絵を始めたそうです。切り絵との出会い、魅了され

た氏は、独学でその技法を習得し創作活動を続けられました。その後、日本剪画協会に所属し、単なる切り絵でなくもっと芸術性を高めた作品として追求してきました。

この技法の苦勞された点とは尋ねると、「対象物を想像したり、写生したりして、モノクロに美しく図案化する過



→ 来年の干支「子」を描いた色紙

程が一番大変です。それは、紙を切った時のシャープな線を活かしつつ、切り抜く際にどこか一カ所は必ずつながないければならぬという制約があるからです。また、「切り抜いた紙を台紙にはりつける時には、形が崩れないように細心の注意を払いながらしなければなりません。特に円形のデザインのものは紙の特性からか思うようにならず苦勞します」とのこと。

今後の抱負については、「いつまでできるか自信はないが、これからも気力の続く限り創作を続け、失われつつある大野を作品として残していきたい」と語っておられました。





市民のページ

北信越大会で優勝



九月二十二、二十三日に新潟県で開催された「第二十回北信越小学生男女ソフトボール大会」に出場し、見事優勝したのが「春日ソフトボールスポーツ少年団」です。六年生八人を含め二十一人で大会に臨みました。

チーム結成は昭和四十九年ごろ。春日の育成会行事として行われていた少年ソフトボール大会がきっかけだそうです。「福井市のチームなど比べると試合数が少ないので、その分は練習で補っています。子どもたちが大人になった時、いい経験だったと思ってもらえるよう指導しています」と平成二年から監督を務める福田政史さん。

北信越大会では、準決勝で石川県のチームに八対〇で快勝し勢いに乗って決勝へ進出。決勝では福井市のアスワボンバースに五対二で勝ち、優勝を勝ち取りました。一

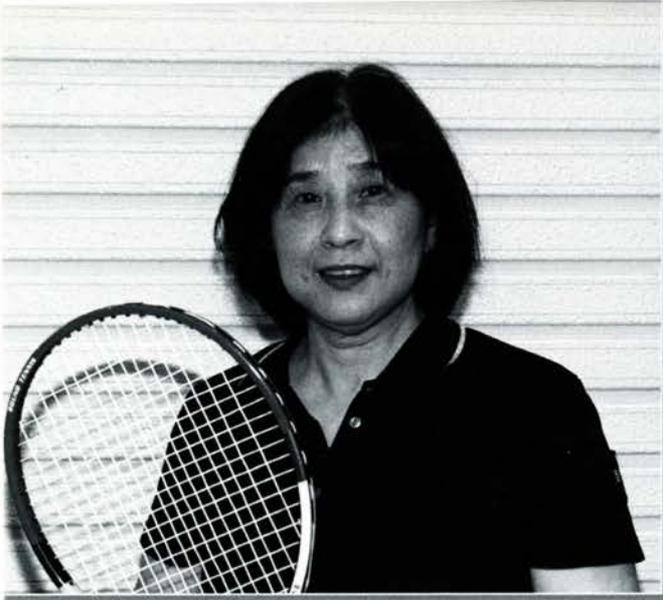
人で投げ抜いた六年生の水上涼介君は「チームが先制点を取ってくれたので、普段どおり投げるのができました。三振が取れてうれしかった」。決勝で打球を追ってフェンスに激突し、救急車に乗ったと話す五年生の森永育宏君は「ライトを守っていて、捕れる」と思い、打球だけを見て追いかけました。捕球できたので良かった」と試合を振り返ってくれました。

昨年の秋からキャプテンとしてチームをまとめた六年生の安川悟君は「練習はとてもしつかったけど、大会で優勝したいという強い気持ちで、みんなで頑張りました。北信越大会で優勝した時はとてもうれしかった。中学生になったら野球部に入りたい」

と話してくれました。春日ソフトは有終南小学校のグラウンドと体育館で練習を行っています。練習の見学や入団の申し込みは、福田さん（☎66・3585）までお問い合わせください。



あなたも紙面に参加しませんか。希望する方は、
情報広報課まで ☎0779・66・1111



藤堂 百合子さん (60歳・明倫町)

藤堂さんは7月に東京都で開催された「第25回全日本バウンドテニス選手権大会」シニア女子ダブルスの部で、福井市の選手とペアを組み、見事初優勝しました。

——全国大会出場の実験は

バウンドテニスの大会は年齢別にフリー、ミドル、シニアの部に分かれていて、4年ほど前にミドルの部シングルスで出場したことがあります。これまで、ダブルスを組む相手が見つからず、シングルスで戦ってきましたが、福井市の水野喜代美さんが相手を探していると聞いて、こちらからお願いして組むことになりました。

こんにちは

——ダブルスとシングルの違いは

自分で試合を組み立てるシングルスと違って、ダブルスはペアを組む相手の得意技を理解し、会話しながら試合運びを進めることが大事だと思います。それにある程度、二人の力が平均していることも大切です。水野さんと一緒に練習することはなかなかできませんが、週2回は福井市まで練習に出掛け、連絡をとりながら練習するようにしています。

——決勝は昨年の優勝ペアが相手だったそうですね

シニアダブルスの全国大会出場は初めてで、相手のことは知りませんでした。試合では、平常心で臨めたのが良い結果になったのだと思います。来年はシードで全国大会に出場することができますので、連覇目指して頑張りたいですね。

——この競技の魅力は

10年ほど前に愛知県で始めたバウンドテニスは、生涯スポーツですが、競技性が十分あり、練習と努力によって上達もし、公式戦や交流大会もある奥深いところが魅力ですね。主人の定年を機に大野に帰ってきて、大野のクラブで練習に励んでいます。元気である限り続けていきたいですね。

「競技の奥深さが魅力」

バウンドテニス全国大会ダブルスで初優勝

知っているようで知らない

「越前おおの」再発見②

知っていると知らない「越前おおの」の魅力。二回目は「大野が関係する小説」です。

▼無茶の勤兵衛日月録シリーズ

ズ「山峡の城」、「火蛾の舞」、「残月の剣」(浅黄斑著 二見書房 六八〇円)

藩主が松平時代の越前大野藩と江戸を舞台に描かれた長編時代小説。大野の地名、風習、言葉がふんだんに登場し、市民にとっては特に臨場感あふれる物語。

最新刊の四巻目が十月二十日に発売されました。

▼「銭屋五兵衛と冒険者たち(海の街道)」(童門冬二著 集英社 一〇五〇円)

加賀の豪商・銭屋五兵衛は北方交易で金沢藩財政に貢献。その遺志を継いだ大野弁吉はやがて彼の妻の出身地越前大野藩で土井利忠公と出会う。幕末に国際化の道を歩んだ男たちの冒険小説。

▼「そろばん武士道」(大島昌宏著 学陽書房 七三〇円)

莫大な負債を抱えた幕末の越前大野藩を藩直営店の



無茶の勤兵衛 日月録シリーズ

大野屋など数々のアイディアで再建した内山七郎衛門良休を描いた物語。

▼「不殺の軍扇 金森長近」(桐谷忠夫著 叢文社 一六八〇円)

大野城下町の基礎を築いた異色の戦国部将金森長近公の八十年の生涯を描いた物語。

▼「我が標的は日本」(桑原讓太郎著 角川春樹事務所 八〇〇円)

世界最強のテロリスト軍団が日本へというサスペンス小説。後半の逃避場面に大野市、九頭竜ダムが登場。

※以上は現在、書店で入手できる本です。(価格は税込)



みんなで太極拳

「大野市スポーツ・レクリエーション祭」が10月8日、エキサイト広場などで開催されました。開会式後の準備運動として「みんなで太極拳」に挑戦。呼吸を大切にしながら、ゆっくり体を動かしました。

健康は「食」から

食生活改善推進員連絡協議会による健康食講座が10月4日、有終会館で開催されました。参加した32人は、体脂肪チェックや体操などの後、調理実習に挑戦。健康づくりに欠かせない食の大切さを学びました。



岩倉市との民間交流

今年1月に友好交流に関する合意を行った愛知県岩倉市。民間レベルでの交流を進めようと、岩倉市の産業や教育・文化などの関係者14団体26人が10月4日、当市を訪れました。御清水や七間通りなどを散策した後、当市の関係団体代表者と意見交換。各団体の活動を紹介しあい、今後の交流などについて活発に話し合いが行われました。

「サバンナ動物」小枝で再現

手作りハウス・ティンクルによる「小枝のサバンナ展」が、9月23日から10月1日にかけて平成大野屋二階蔵で開催されました。岐阜県在住の画家・造形作家水野政雄さんが小枝を用いて作製したキリンやウシなど約40種類の動物を展示。訪れた人たちは、群れで活動する動物たちの様子を興味深く見入っていました。



話題のひろば



越前大野駅 花で飾る

南部児童センターに通う児童30人が9月25日、JR越前大野駅で花の植栽を行いました。越美北線沿線を花で飾る運動に参加したもので、子どもたちはプランターにコスモスなど3種類の苗を植え、駅の玄関に飾りました。



和泉で横笛の調べ

和泉地区に古くから伝わる「青葉の笛」伝説。その伝説を今に受け継ごうと活動する青葉の笛保存顕彰会による「フォーラム青葉の笛」が9月22日、23日に開かれました。23日に笛資料館で開かれた横笛のつどいには、県内外から21人が参加し、日ごろの練習の成果を披露。横笛の音色が静かに響き渡っていました。



親子で遊ぶ

地域子育て支援センターに通う親子約80人が参加しての運動会が10月4日、有終会館で行われました。参加者は体を動かしたり、触れ合ったりしながら、遊ぶ楽しさを味わいました。



8種目でチャレラン

大野市子ども会育成連合会によるチャレラン大会が9月23日、学びの里「めいりん」で開かれました。市内全小学校から102人が参加。ペットボトルの口めがけてはしを落とすゲームやぞうきんがけ20秒走など8種目に、果敢に挑戦していました。



笑顔！で「いただきます」⑧

柿と大根の酢の物



材料（一人分）

※分量は給食献立に基づき表示

- ・ダイコン 30g^ラ
- ・柿 15g^ラ
- ・酢 3g^ラ
- ・塩 0.3g^ラ
- ・砂糖 2g^ラ

子どもたちの健康を支えている給食献立。今月は「柿と大根の酢の物」です。

給食からも一品



作ってみよう

- ①ダイコンは皮をむいていちょう切りにし、塩を入れてゆでる。柿は皮をむき、4つか8つに切っていちょう切りにする。酢、塩、砂糖を混ぜ合わせて甘酢を作る
- ②①の材料の水気を切り、甘酢であえる

達人のワンポイントアドバイス

ダイコンと柿は切る際、大きさをそろえるようにしましょう。器に盛る時は色どり良く。ダイコンをゆでる際、塩を入れることで苦味を取ることができます。

（学校調理師 中村啓子さん）



市民のうごき

平成19年10月1日現在

世帯数	12,277世帯（-3世帯）
人口	38,921人（-35人）
〈男〉	18,575人（-11人）
〈女〉	20,346人（-24人）

◆9月中の内訳

転入	51人	出生	21人
転出	68人	死亡	39人

た。ソフトボール大会に地区体育大会、保育園運動会、町内レクリエーションなどなど。スポーツ少年団紹介、親子運動会や市のスポレク祭と、取材でもスポーツ関係が目白押しで、「スポーツって仕事の疲れや日常のイライラなどを吹き飛ばしてくれるなあ」と、再認識（林）



編集後記

スポーツの秋だとかづく感じるほど、九月から十月にかけて毎週日曜日はスポーツばかりでした。



文化の日を中心に文化祭や文化的行事が花盛り。力のこもった多彩な展示作品、印象的な催しなど楽しみの一つである。だが、大野で生まれ育った人は、十一月三日と聞くと大野藩主第七代土井利忠を祀った柳廼社の祭礼の方がピンとくる▼最近祭りという文字が乱発されている。チラシ広告には、売り出しを目的とした創業祭・開店〇周年祭等々。商工・観光のイベントや学校祭など枚挙にいとまなし。祭りという言葉が、華やかなにぎやかな行事という代名詞となっている▼現代はお祭りのなものが日常生活にあふれ、毎日がお祭り気分になっている。祭りのごちそうの代表だった赤飯や寿司やお餅なども日常食となった。その上、これらの祭りに神様は存在しない▼古来祭りの姿は、五穀豊穡や家内安全平安無事を氏子たちが祈願するものだった。都市農村の生活様式が変化していく中で伝統文化的行事や信仰心の維持が、人口減少や少子高齢化で薄れていくのは寂しいことだ▼大野市民憲章に「わたれは伝統を受け継ぎ新しい文化を育てます」の文言の重みを今こそ受け留めていきたい。大野盆地最後の柳廼社の祭礼は冬支度の目安となっている。これも当市のふるさと文化の風物詩である（安田）

発行 福井県大野市

編集 情報広報課 広報広聴係 (☎0779・66・1111)



100

この広報紙は、古紙配合率100%の再生紙と環境に優しい大豆油インキを使用しています。